尉面

徳威三島神社・浮島神社蔵

木造彩色
面長一六・八糎
〔図版10〕

昨年秋の特別展覧会「古面の美―信仰と芸能―」では、能の家元からだけでなく、各地の古社寺からも所蔵の面が積極的に展示され、わが国の古面の諸相を大局においてほぼとらえることができたかに思われる。しかしながら、出陳が望まれていたにもかかわらず、諸般の事情により取りやめられた優品も少くない。ここにとりあげる尉面もそのようなもののひとつである。かつて後藤淑氏が紹介されたことがあるが[1]、あらためて当面の位置と特質を探ってみたい。

円に近い丸顔で、額の上に被り物の一部をわずかにあらわす。両眼は不揃いで、左眼は笑うがごとく、右は釣りあがり細い。この眼の変化に応じて眉も褶曲を描く。長く垂れる鼻はゆるやかに右へ曲がり、口さきはつぼめて空吹く。

黒色尉に多い眉の植毛の孔はなく、両のこめかみに紐孔が各一、両口端に顎を吊る紐孔が各二、顎の中央に植毛孔が一それぞれみとめられる。

キリ材、切顎とする。表面は現状古色。裏面は、表の起伏に合わせて滑らかに刳られ、黒漆塗りとする。一般の能面の裏のように、眼や鼻の周囲に鎬ぎをつけて刳るのではなく、平滑、薄手である。

歪みの相をあらわすが、容貌にはある種の緩やかな動きが感じられ、釣りあがる右の眉の勢いを承けるように、鼻はゆっくりと右へカーブし、その動きはつぼめた口もとへと流れる。鼻筋や口先に走る縦皺もこの動きに添ったものである。歪みの緊張の力が顔の右半分に集まるかのごとく、右の頬はやや峻隘の感があり、一方左頬は、なだらかに傾斜する。皺はこのような貌の特徴に合わせ、軽妙な筆勢を思わせて顔中自在に動く。

両の眼に着目すると、右の眼尻は、上の瞼が下瞼の上にかさなり、左のそれは、欠損があるため詳細は不明ながら、下瞼が上瞼の上にわずか懸っていた形跡がある。柔軟な塑形の特質を木彫に写したのであろう。さらに、空吹く口もとの筋肉の収斂に呼応して、眉の上や左頬の頂はすこしへこみ、下顎には太い溝が数本縦に走るが、これらは粘土を指先で押してくぼませる塑造の表現によく似る。このように目尻や頬・下顎のつくりを始めとして、鎬ぎを捨てた軟質なモデリングは当面の性質を考える上で看過できない。

笑いとも怒りともつかぬ不釣り合いな眼をあらわし、眉間を寄せる眉の盛りあがりは苦悶の表情に近い。また空吹く口もとは奇声を発しているようだ。全体として、単一の日常的な感情を汲み取ることは難しく、悲・喜・怒をない混ぜにした、一種の中間表情ともいうべきもので、極めて神秘の感が強いといえる。

さてこのような歪みの相はまことに奇抜なようであるが、眼を他の古面に転ずると、このような表現はけして珍しいものではない。次に二、三別の例を引き合いに出して、当面と比較してみよう。

歪みの相をあらわす仮面としては舞楽面二ノ舞が第一に考えられ

る。下品な老相が歪みとなってあらわされており、この種の面を考える上で忘れることができないが、直接的に比較の対象となり得るのは、福井・個人蔵の尉面[2]（図4・5）がまず挙げられよう。この面の眼は当面とちようど左右逆に、左側が釣りあがり、右側が笑うように垂れる。鼻は左へゆるく曲がり、反対側の頬は頂の下あたりが少しくぼむ。皺は強くしなりながら顔中を這い、開いた口から抜けの多い歯がのぞく。土の匂いのする骨太の老いた田夫の相であるが、大胆にデフォルメされた両眼が、平凡な感情の表出を拒否しており、理解し難い不思議な表情をかもしている。神秘の情を有効に出す面としては、徳威三島神社・浮島神社の面とともに双璧であろう。

この面がもつ粗野な歪みは老醜ともいうべきものに近づいているが、一方、本稿の徳威三島神社・浮島神社蔵の面には、これに比較すると、人の不意をつくような不気味な鋭さがあるのであり、作者の見据え計った正確な意図が感じられよう。

その他に、熱田神宮の尉面[3]（図6）は、長顔・隆鼻の異人の顔を直裁にあらわすもので、アンバランスな左右の眼もこの特異な容貌にマッチしている。口笛を吹くように唇をつぼめ、頬や下顎の筋肉はひきつっている。不均衡の両眼と空吹く口の組み合わせ、および軟らかな肉付けなど、徳威三島神社・浮島神社の面に共通する。

同じような相の面をもう一例あげると、熊本・網田神社の女面[4]（図7）は、眼はそれほど極端ではないがやはり釣り眼と垂れ眼、鼻筋には縦皺が走り、兎口のような唇をつぼめる。右の頬は少しくぼみ、皺も左右不揃いである。

歪みの面の例はほかにも多く、これらについては別に論ずる機会もあるであろうが、以上のように眺めてくると、当面の異様に思われた相貌もある展開の上に乗るものであることがわかる。眼と口が不自然に歪むのに応じて、顔全体の筋肉と皺はいっせいに動く。左旋回、右旋回の違いはあるが、あたかもシャーマンの急なトランスのひきつけ現象に似て、苦しげに顔が歪みだし、奇矯な表情となる。正常から異常へ、この一瞬の変化の気韻を見事に捉えたのが当面であるといえる。しかも、先に福井・個人蔵の面との比較でみたとおり、当面は思わず人の心をとらえこむ迫力をもっており、この種の面が本来備えていたはずの呪術的意味合いを感じさせる点、極めて古式ということができる。いまだ作風的見地から製作時期を割りだす段階ではないが、形式的に整った翁面などが成立する前の一時期の風を思わせ、遅くとも鎌倉時代は降らない古作といえよう。

キリ材という、いわゆる能面にはめずらしい用材であることや、技法・作風から見て、原本となった一層古い面の存在を窺わせることなど、今後考えなければならない問題も多いが、いずれにしても、のちの翁系の面（翁・黒色尉・父尉）への展開を考える上で見逃すことのできない好資料である。

当面を蔵する徳威三島神社と浮島神社は、愛媛県温泉郡重信町字北野田および字牛淵にそれぞれ鎮座する。この地域は、北に明神森、東三方森、南に青滝山、石墨山という、千メートルを越す山々が聳え、その谷に発する重信川のつくる扇状地とそれにつづく小平野の中ほどに位置する。

この両社は、本稿で扱った面を含む三面[5]の仮面をご神体とし、一年交替でこのご神体を奉移し、毎年十二月二十日に面渡の行事があ

る。三面のうち、当面が最も古く、他の二面は室町時代のもの。収納の箱の銘によれば、それぞれ「表筒男命」「中筒男命」[6]「底筒男命」と称されていたらしい。近世の地誌類にはこの面についての記載が若干あり、その来歴を伝えている。すなわち、この三面はむかし海上にて得られたもので、さっそく明宮に奉納され、つづいて河之内法師森、雨龍宮へと順に移され、最後に現在の二社の有になったという。[7] 少々の異説はあるが、[8] この両社に祀られるまでは各地を転々としたらしい。なお、両社が一年交替でこれを移すことになった事情については、享保十七年（一七三二）の寺社奉行定があり[9]参考になる。

（伊東史朗）

注

1　後藤淑「伊予浮島神社の黒尉面」（『演劇研究』三　昭和四十三年『民間の仮面』所収）

2　堅材、切顎、表　彩色、裏　黒漆。縦一六・七×横一四・四×厚七・四cm

3　ヒノキ材、表　彩色、裏　黒漆。縦二六・三×横一五・六×厚一〇・四cm

4　クス材、表　古色、裏　黒漆。縦一九・九×横一二・五×厚五・二cm

5　三面の基礎データは次のとおり。その一は本稿所論のもの、その二は図8、その三は図9をそれぞれ参照。

	（その一）	（その二）	（その三）
（材質）	キリ	クス	クス
（形状）	切顎	切顎	切顎
（法量）	縦一六・八	一七・〇	一八・五
	横一五・〇	一四・三	一六・一
	厚　六・四cm	七・七cm	八・一cm

6　蓋の内側に次の墨書がある。

此御箱文久元甲子年／牛淵社御鎮座之所七／月廿六日ヨリ八月二日迄御／代宣所雩ニ付松前雨滝／両所御幸御祈禱之砌調／之

7　『予陽旧蹟漫遊記』（『続伊予温古録』所収）「浮島神社」

慶長五年九月十七日荏原城戦争の時、諸浪人相集り、当社殿を焼き宝記を奪去しとて、今は旧記なく、御面と称して古代の面三つあり、是は野田井村徳威三島社と相持に、毎年十二月二十日当社と鎮座替を交代す、此面は推古帝の御宇乎致宿称益躬公、越智郡国府の海上にて得、明宮へ奉納し有しが、文中の戦に社僧王楯より持出し、河之内法師森へ移し、後雨滝の宮へ移し、其後野田・牛淵両社の有となりし

8　『伊予古蹟誌』巻第三「浮島神社」

古河野某観ニ猿舞於今治一、海上有レ物、直流触ニ于舞台一、乃使ニ長沢左近視一之則一片楂也、剖而窺レ之蔵ニ仮面三一矣、河野矣曰、是蓋龍伯所レ献也、使レ蔵ニ于左近之家一、後逮ニ乎河野氏亡一蔵ニ之雨滝宮一之内一廟令佐伯越前蔵ニ之於斯廟一、且加ニ繕治一、後世尚伝矣

9　定

一浮穴郡野田牛淵両村三嶋明神宮ニ往古より有来之面唯今迠は肥前方に有之候処向後一年替に両社エ指置可申候尤当時陸奥方エ相渡夫より以後は極月廿日を限相互ニ請渡可致事

右之趣於相背は急度可申付者也

享保十七子年五月　寺社奉行

（付）図4・5・7の写真は中村保雄氏から拝借したものである。

図２　尉　面　（右側面）

図１　尉　面　（左側面）

図３　尉　面　（裏）

図4　尉　面　（福井・個人蔵）

図5　尉　面　（福井・個人蔵　裏）

図6　尉　面　（熱田神宮）

図7　女　面　（網田神社）

図8　翁　面　（その2）

図9　翁　面　（その3）